

二〇一四年度

入学試験問題

(二月一日午前実施)

国語

多摩大学附属聖ヶ丘中学校

- 一 開始の合図があるまで問題用紙・解答用紙にふれないでください。
- 二 開始の合図があったら、最初に問題用紙十八ページ、解答用紙一枚を確認してください。
- 三 解答用紙に受験番号と氏名を記入してから始めてください。
- 四 問題についての質問は受け付けません。印刷のはっきりしないところや用事がある時は、声を出さずに手をあげてください。
- 五 字数が指定されている問題は、句読点も一字として数えてください。
- 六 問題用紙は、回収しません。
- 七 筆記用具の貸し借りはしないでください。
- 八 試験時間は五十分です。終了五分前になったら知らせます。
- 九 答案を書き終わっても座席からはなれないでください。

一

次の(1)～(5)の——線部の漢字をひらがなに、(6)～(10)の——線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- (1) 心の中で互^{たが}いに了解^{りよう}ができているおきてのことを不文律^{ふぶんりつ}という。
- (2) 横領^{おうりやう}の罪に問われる。
- (3) 名利^{めいり}をむさぼる。
- (4) 委員会の改組^{かいしよ}。
- (5) 陰謀^{いんぼう}を看破^{かんぱ}する。
- (6) 会議で決を卜^うる。
- (7) ベンカイ^{べんかい}がましいことを言うな。
- (8) メイロウ^{めいろう}な性格。
- (9) 王様のゴエイ^{ごえい}。
- (10) キンダン^{きんだん} 症状^{しやうじやう}。

二

次の(1)～(5)の各文の()にあてはまるものを、後のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- (1) あの子には本当に()を焼かされる。
- (2) 都会は生き馬の()を抜^ぬくようなところだ。
- (3) 自慢^{まん}の()を折られてしょげている。
- (4) 気に入らぬ事を言われて()を曲げる。
- (5) 彼は絶対^{かくれ}に自分の()を痛めるようなことはしない。

ア 鼻 イ 目 ウ 腹 エ へそ オ 手

次の詩と解説文を読んで、あとの問いに答えなさい。

かほちゃのつるが

原田 直友

かほちゃのつるが

はい上がり はい上がり

葉をひろげ 葉をひろげ

はい上がり 葉をひろげ

細い先は 竹を「1」にぎって

屋根の上に はい上がり

短くなった竹の上に はい上がり

小さなその先たんは いっせいに^①赤子のような手を開いて

ああ 今 空をつかもうとしている

注 赤子……あかちゃん

題名は「かほちゃのつる」でなく、「かほちゃのつるが」です。^②主語をあらわす「が」がついています。また、「はい上がり」「葉をひろげ」と繰り返すことによって、「さらに上がり」「さらにひろげ」という力強さが伝わりと同時に、上と横に動きが感じられて、詩を「2」なものになっています

問一 詩中の「1」にあてはまる語としてふさわしいものを、次から選んで記号で答えなさい。

ア しっかり

イ ひっそり

ウ ゆっくり

エ のんびり

問二 —— 線部①「赤子のような」とありますが、どんな様子を表現していますか。次のア～エの中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア かわいい

イ ひよわい

ウ やわらかい

エ うるさい

問三 —— 線部②「主語をあらわす『が』がついています」とありますが、「が」がついていることで、題名としてどのような効果がありますか。説明しなさい。

問四 文中の「2」にあてはまる語としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 直接的

イ 間接的

ウ 平面的

エ 立体的

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(なお、作問の都合上、省略した部分があります。)

話しかけるタイミングの悪い人が増えた。彼らは呼吸が上手くつかめないものである。私は、これはネット社会の影響だろうと考えている。

電子メールは便利である。メールのお陰でビジネス関連の時間、特に伝達事項にかかる時間が随分短縮された。こちらは、時間の余裕のある時にメールを書けばよい。相手も、時間の余裕のあるときに読めばよい。自分の都合、相手の都合、双方に利益があるのである。

これを繰り返しているぶんには、相手の都合を考えなくてもいいのである。自分の都合のいい時に「伝達」が済んでしまう。ということは、相手の様子を讀むトレーニングを積まなくなる。相手の呼吸に合わせるという感覚がなくなっていくのである。電話は、こちらか、相手か、どちらが忙しくても伝達を簡略化させなくなるものだ。だが、それをぐつと堪えて相手を察する。相手の真意を汲もうとする。それが相手の呼吸を掴むトレーニングになる。

だから電話がいいとはいわない。私も電子メールは便利だと思う。もう、これがなくてはビジネスは前に進まない。しかし、単純に不便な社会になったとも思えないのである。タイミングという概念は「自分中心」の人には必要ない。アルバイトの面接などをしていると、「これほど自分中心の人が増えたのか」と暗澹たる気持ちになることがある。

(中略)

「間違え」「間に合う」「間抜け」「間が悪い」「間が良い」……。

日本語には、間の大切さを教える言葉がたくさんある。

私は演出をするとき、役者に「一間置いてください」(1)「半間置いてください」と言うことがある。

次の台詞を観客にきちんと伝えたい場合は、その直前に一間置いて貰う。一間というのは、ゆつくり息をする時間である。役者がゆつくり息をすれば、その時間が間になり、観客は、次にどういう台詞が出てくるのだろうと、気持ちを乗り出して聞きに来る。次を想像すると言い換えてもよい。

「半間置いて」というときは、一間置くと、くど過ぎると思うときである。客にきちんと聞き取って欲しい台詞は、重要な台

詞である。(2)、あまり間を置き過ぎると、芝居がくどくなりすぎる。大切なものが多すぎると、受け手はうんざりするのである。

大切な台詞だけをきちんと立てて他はすつと流す、その勘所が台詞術のツボである。

(3)、そのツボは役者によって勘所が異なり、他の役者に教えられるようなものではない。

故・古今亭志ん朝さんが父親の志ん生さんの芸について、こう語っていたことがある。志ん朝さんも名人だが、志ん生さんは昭和の名人といわれた落語家。

「おやじが小声でボソボソとしゃべるんです。客は、何を言っているんだろうと身を乗り出す。そのタイミングで、くすぐりをパツと入れる。すると客はどうつと受けるんです」

つまるところ、間のよさで客の笑いをとるのである。喋りの上手さは、間の上手さと言い換えてもよい。

私の実感でいえば、舞台上で役者がしゃべっている間は、観客の意識は舞台から押されてくる感じになる。逆に、役者が間をとっている時間は、観客は舞台に引き寄せられる感じになる。(4)、役者と観客は舞台と客席の間で、押し引きの綱引きを繰り返すことになる。

これが、舞台と客席の間の「交流」である。心地よい交流を観客にさせてくれる役者が、名優ということになる。名優と言いついても、自在に心地よい台詞を発することが出来る役者など何万人に一人もない。

台詞術の基本もあるにはあるが、やはりプロの場合は、持って生まれた才能の世界というほかない。

話芸の名人として有名な徳川夢声は、そのキャリアを無声映画の弁士からスタートしている。彼は他の弁士がいかにも喋ろうかと努力しているときに、いかに黙るかを工夫したらしい。

弁士が黙るということは、間を置くということである。間が長すぎると客は焦れる。「タルい」という状態になる。逆に間が短か過ぎると、話が慌ただしくなってしまう。「バタバタした感じ」に聞こえてしまうのである。

言い換えれば、間は、観客が話に積極的に参加する時間である。話し手が触媒となって、自分の想像力を膨らます時間でもある。

間のないしゃべりと間のあるおしゃべりは、^④散文と韻文の^{いん}違いである。散文は小説のように、読めば内容をすべて受け取ることができる。自分で想像力を膨^{はく}らませなくても、内容がわかるように書くのが散文である。

ところが韻文は、受け手の想像力によっては、その内容さえ変わることもある。

「古池や 蛙^{かわず}飛びこむ 水の音」

有名な松尾芭蕉の俳句である。この俳句に接したとき、受け手は自分の想像力を働かさなければ、鑑賞^{かんしょう}することができない。古池の後に続く「や」は切れ字である。強意の助詞ということもできるが、われわれ演劇人の視点からみると、「間を開ける場所」でもある。

「古池や」といった後に、一瞬開ける。受け手は、古い静かな池を想像する。次に何が起ころうと期待する。受け手は俳句に積極的に参加することになる。そして芭蕉は、池の中に飛び込む蛙^{かわず}を見せてくれる。蛙が飛び込んだ後の池には、ただ静かに波紋^{なみだ}が広がっている。

「古池や」と切れ字がある場所で、芭蕉と受け手は交流する。そして句を読み終わったときに、^⑤芭蕉が提示した世界の広がり^{ひろがり}に共鳴し、感動を共有するのである。

話芸で言うところの間は、俳句の切れ字のようなものである。その瞬間^{しゅんかん}を受け手に想像させ、そして次の台詞^{せりふ}を言い終わるときに、感動を共有する。

間があることで、話し手と観客は一体になれるのである。

俳句の切れ字の場合は、受け手は自分の間で続きを読む。間の長さは、受け手の読解力や、その作品をどの程度深く味わいたいか、によって変わってくる。

(中略)

音楽も同様である。CDがどれほど音の再現力を持っていたとしても、ミュージシャンのライブがなくなることではない。ロックのコンサートでは演奏の途中^{ちゅうちゅう}で、わざと無音の状態を作る場面がよくある。ミュージシャンたちはステージで、お互い^{たが}気持ちを合わせる。そして、無音の間の後に、全員で呼吸を合わせて演奏を再開する。曲の最後のほうで一瞬間^{ひととき}を止めて、一斉^{せい}にメンバーがジャンプして音を出して締める、という光景を見たことがあるのではないか。この間合いがずれると、間が抜^ぬけてしまう。逆に

きれいに決まると、曲全体が引き締まって聞こえる。

観客は、一瞬の沈黙^{ちんもく}の間、演奏再開のタイミングをミュージシャン同様、息を詰^つめてはかっている。ステージと客席が一つになる瞬間である。そしてミュージシャンと客の気持ちが一つになって、タイミングが合うと、「気持ちが揃^{そろ}った」と(5)感に包まれるのである。

(竹内一郎『人は見た目が9割』より)

問一 本文中の(1) (4)にあてはまる言葉を、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ あるいは ウ もちろん エ だから

問二 本文中の(5)にあてはまる言葉を、本文中から抜き出して答えなさい。

問三 本文中には、本来の語の対義語が使われているために、文意が通らなくなっている一文があります。その一文を抜き出して答えなさい。

問四 線部①「それ」とありますが、「それ」が指す内容を簡潔に答えなさい。

問五 ——— 線部②「間の大切さを教える言葉」とありますが、次のア～カの中で、ふさわしいものは○、そうでないものは×を答えなさい。

ア まの当たりにする イ まに受ける ウ まを持たず エ まが差す オ まが延びる カ まが持てない

問六 ——— 線部③「話に積極的に参加する」とありますが、同じ内容の表現を、本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問七 ——— 線部④「散文と韻文の違い」とありますが、一言で言うとな何の違いですか。次のア～オの中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 弁士 イ 観客 ウ 内容 エ 想像力 オ 台詞術

問八 ——— 線部⑤「芭蕉が提示した世界」とありますが、具体的にどのようなことですか。本文中から六字、九字、十四字でそれぞれ抜き出して答えなさい。

問九 ——— 線部⑥「感動」とありますが、感動の中心にあるものは何ですか。一語で答えなさい。

五

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（なお、作問の都合上、省略した部分があります。）

中学2年生の陽子と1つ歳下の弟リン。両親が仕事で忙しく、いつも2人で自己流の遊びを生み出してきた。新しく見つけたとおきの遊びは、真夜中に近所の家に忍び込んで屋根にのぼること。リンと同じ陸上部の七瀬さんも加わり、ある夜3人で屋根にいたところ、クラスのいじめられっ子、キオスクにその様子を見られてしまう……。

「陽子、陽子っ」

十一月に入ったとたん、朝の冷えこみでベッドとの別れがつらくなった。

一日のうちで一番せつない数分間。

その朝も、わたしが未練たらしく別れの感傷にひたっていると、リンが浮かれた足どりでやってきた。

「チャンスだよ。おやじとおふくろ、今夜は仕事で帰らないって」

ぎくりとした。

「天気予報は？」

今のところ雨音は聞こえないけれど、「とつぜん嵐、のち大雪、ところによって竜巻」みたいなのを期待して聞くと、

「くもりのち晴れ」

なんて平凡な。

「降水確率は？」

「五パーセント」

「湿度は？」

「知らないよ」

「円と株の動きは？」

「陽子、見ぐるしいよ」

リンがため息をはきだした。

「七瀬さんだって二回目の屋根のぼり、楽しみにしてるんだから。今日のところは潔くあきらめな」
あきらめはしても、^②潔くはなれなかった。

なにしろ、今回はキオスクというお荷物がくつついてくるのだ。いつもなら、屋根にのぼる日は朝からご機嫌のわたしも、キオスクのことを考えると心は重い。

キオスクのほうもそれほど^③軽やかな心境ではなさそうだった。

「今夜、のぼるから」

朝の教室で伝えたとたん、キオスクは青白い顔をますます青くして動揺をさらけだした。

「どんな服を着ればいいのか？」とか、「どんな靴をはけばいいのか？」とか、「どんなふうのぼればいいのか？」とか、うるさくしてしまう。

その上、八時にうちで集合という予定にまでケチをつけはじめた。

「あ、悪いけどぼく、八時は無理」

「なんでよ」

「九時から十一時までは家にいなさいいけないの。ネット仲間とチャットの時間だから、それだけは外せなくて」
あいかわらず世紀末の大戦について語りあっているらしい。どうして今夜のことに専念できないのか。

「どっちか選べなさいよ。世紀末か、今夜の屋根か、どっちか」

キオスクがうつむいて考えこむ。床と相談しているのかもしれない。

結果、キオスクはなんとも中途はんばな答えを出した。

「屋根にのぼるのって、真夜中でしょ？ ぼくんちの両親、十時には眠っちゃうから、そしたらぼく、こっそりぬけだして飯島さんちに行くよ。チャット終わってから、ぜったいに行くよ」

「勝手にすれば」

怒ったふりをしながらも、わたしは内心、よし、と思っていた。

キオスクは来ないかもしれない。「ぜったいに行くよ」なんて言いながらも、今からこんなにも（１）が引けている。だいたい、家をぬけだすところを両親に見つかるとはかもしれないし。

そういえば、（２）、ということわざもあった。

さすが昔の人はいいことを言う。

わたしは待ち人現れずに、リンは現るに、一週間分のテレビのチャンネル権を賭けた。待ち人というのは言うまでもなくキオスクのこと。

結論からいうと、わたしは負け犬だ。犬にまでなりさがることもないけど、とにかく負けた。

午前〇時半。約束の時間を三十分もすぎて、わたしが勝利を確信していたとき。リンはソファでうとうと、わたしはまたしても七瀬さんにまるめこまれて勉強していると、玄関のチャイムが不気味に鳴りひびいたのだ。

「出たっ」

わたしはノートに顔をうずめ、

「来たっ」

リンがソファから飛びおきる。

三人そろって玄関へ急いだ。

キオスクはまるで魔法使いに（３）にされてしまった男の子のようだった。両足を踏んぱり、両手を握りしめ、全身をかしんこちんにして突っ立っている。指で弾いたらしい音がしそうだ。でも、同時に体のどこかがぼろっと崩れおちそうだった。

「遅かったね。みんな心配してたんだよ」

リンが声をかけると、こわばったキオスクの顔の中で口だけがかすかに動いた。

「飯島さんの地図、わかりづらかった」

うらめしそうな声を出す。

「わかりづらく書いたんだもん」

わたしが言うと、

「え、どうして？」

キオスクが素朴な質問をして、

「早く行かないと夜が明けちゃうよ」

話がややこしくなる前に、リンが靴をはきはじめた。

(中略)

のぼる順番は前もって決めていた。リン、七瀬さん、キオスク、わたし、の順。

まずはリンが用心深く金網に手をかける。ギシッと鈍い音がした。

「ゆっくり行こう。できるだけ音を立てないようにね」

わたしたちはふりむいてささやくと、リンはスローモーションのテンポでのぼりはじめた。続いて七瀬さんが金網に身をよせた。慎重に慎重に足を進めると、屋根の高さまでのぼりつめるのに五分ほどかかる。

リンと七瀬さんがぶじ屋根に移るのを見届けてから、わたしはキオスクの背中を押した。

「あんたの番」

キオスクが金網にむけ、おそろおそろ足を踏みだした。と思ったら、たったの二、三步で止まってしまった。

「飯島さん、先に行つて」

「なに言つてんのよ」

「いいから、お願い。ぼく、最後のほうが落ちついてのぼれるから」

だれかが後ろからフォローしたほうがいいのに、キオスクは頑としてゆずろうとしない。ここであうだしていてもしょうがないので、ぬかして先に行くことにした。

ブルゾンのファスナーがときどき金網に引っかかるほかは、なんの問題もなく屋根の縁までたどりついた。

リンと七瀬さんはすでに屋根の上、ベランダの柵にもたれてくつろいでいる。

思ったとおり、まったくのぼりがいのない屋根なのだった。

ところが、濃紺の瓦に手をかけながらふと見おろすと、ついてきているはずのキオスクがいない。金網の前から一ミリも動かずにいる。

「なにしてんのよ。早くおいで」

どんなに手招いても、キオスクは動きだす気配がない。

わたしはしかたなく引きかえし、途中まで金網をおりていった。

「ほら、おいで。すぐそこまでだから」

左手で金網をにぎりしめ、右手をキオスクにさしだした。

キオスクは動かない。

「どうしたの」

問いつめるようにキオスクの顔をのぞきこみ、どきつとした。

全身でおびえている。

頭を後ろにそらし、かっと両目を広げて、キオスクはどこかを見あげていた。わたしではなく、もつと遠くの暗いどこかを。あまりにも暗くて泣きだしそうだった。

月も星も屋根も。

わたしたちも。

なにもかもが闇に埋もれてしまったように、キオスクはひとりきりで震えていた。

「だいじょうぶだよ」

わたしは右手をぎりぎりまでキオスクに近づけた。④自分でも声の調子が狂っていくのがわかる。

「だいじょうぶ、のぼれるよ。簡単だから。早くおいで」

呼びかけると、キオスクははじめてわたしの声を受けとめたようにハッとした。

ほんの一瞬、キオスクと目が合った。
その目は、逃げたいと言っていた。

知らない町にとりのこされた小さな小さな子供みたいで、早くここからぬけだしたいと、楽なところに帰りたいと言っていた。
⑤ わたしのほうから目をそらした。

「キオスク」

体を支えていた左手がしびれます。限界だ。さしだした右手を金網にもどした。

「いいんだよ、むりしないで。こんなのただの遊びなんだから。のほりたければのほればいいし、のほりたくなければのほらなきやいいの。無理してがんばることじゃないの。なにかを試すとか、乗りこえるとか、そんなんじゃないの」

⑥ いつものわたしの声じゃない。

しゃべればしゃべるほど。キオスクがわたしから離れていくような気がした。実際、キオスクはじりじりと後ずさりをはじめていた。

「だから、いいんだよ。もしあんたがのぼらなくなつて、だれも……」

最後まで聞かずに、キオスクは背中をむけた。草藪の底へと沈んでいくように、一步一步、暗がりのむこうへ遠ざかつていく。肩のあたりがゆれていた。やがては小走りに駆けだした。

キオスクの姿が消えても、草木のざわめきはなかなかおさまらなかつた。

⑦ わたしはキオスクを追いかけることも、ふたたび屋根をめざすこともできず、宙ぶらりんに金網へしがみついたまま、その泣き声のようなうなりを聞いていた。

(森 絵都『宇宙のみなしご』より)

問一 本文中の(1)にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 肩 イ 胸 ウ 腹 エ 腰 オ 尻

問二 本文中の(2)にあてはまる諺として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 急がば回れ イ 焼け石に水 ウ 憎まれっ子世にはばかる エ かわいい子には旅をさせよ
オ 二兎追うものは一兎もえず

問三 本文中の(3)にあてはまる言葉を漢字一字で答えなさい。

問四 ——— 線部①「ぎくりとした」とありますが、その理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア まだ暖かいベッドのぬくもりを一人で味わっていたのに、浮かれた様子のリンに邪魔をされたから。
イ 両親が今晚仕事で帰ってこないことが分かり、リンと二人つきりであることにうんざりしたから。
ウ 今回はど素人で意気地のない初心者のキオスクも一緒に、屋根のぼりをしなくてはならないから。
エ 二度目を楽しみにしている七瀬さんのために、わざわざ屋根のぼりをしなくてはならないから。
オ 十一月になり朝の冷えこみも厳しいのに、より寒さの厳しい夜に屋根のぼりをしなくてはならないから。

問五 —— 線部②「^{いさぎよ}潔くはなれなかった」とありますが、「^{いさぎよ}潔くはなれなかった」陽子がしたこととは具体的にどのようなことですか、簡潔に答えなさい。

問六 —— 線部③「^{かろ}軽やかな心境」とありますが、内容的にほぼ同じことを表現している部分を、本文中から七字で抜き出して答えなさい。

問七 —— 線部④「自分でも声の調子が狂^{くる}っていくのがわかる。」—— 線部⑥「いつものわたしの声じゃない。」とありますが、この時の陽子の声の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア うめき声 イ 猫^{ねこ}なで声 ウ 黄色い声 エ とがり声 オ 金切り声

問八 —— 線部⑤「わたしのほうから目をそらした。」とありますが、その理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア キオスクのあまりのおびえぶりに、いたたまれなくなったため。
イ 体を支えていた手足がしびれて、意識がもうろうとしてきたため。
ウ 小さな子供のように、微動^{びどう}だにしないキオスクにいらいらしたため。
エ 先にのぼって待っているリンや七瀬さんの様子が気になったため。
オ 周囲のものが全て闇^{やみ}に埋^{うめ}もれていくような恐怖^{きょうふ}にとらわれたため。

問九 —— 線部⑦「わたしはキオスクを追いかけることも、ふたたび屋根をめざすこともできず、宙^{そら}ぶらりんに金網^{あみ}へしがみついたまま、その泣き声のようなうなりを聞いていた。」とありますが、この時の陽子の状況^{きょうじょう}の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 孤立^{こり}無援^{えん} イ 無我夢中 ウ 優柔^{じゅう}不断 エ 茫然^{ぼう}自失 オ 一石二鳥

二〇一四年度 国語 解答用紙 (二月一日午前)

多摩大学附属聖ヶ丘中学校

受験番号

氏名

得点

*印のところは、何も記入しないでください。

一

(1)	(4)	(8)
(2)	(5)	(9)
(3)	(6)	(10)
(4)	る	
(5)	(7)	

小計

二

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)

小計

三

問一
問二
問三
問四

小計

四

問一	1	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
問二	2						
問三	3						
問四	4						
問五							
問六							
問七							
問八	六字	九字					
問九	十四字						

小計

五

問一	問二	問三	問七	問八	問九
問四	問五				
問六					

小計

*実際の解答用紙はB4判です。